
すき

ホタル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すき

【著者名】

ホタル

【ISBN】

N4310A

【あらすじ】

好きになつて、喜んで、悲しんで。高校生の恋愛の物語。

第一話・好きな人（前書き）

初めての連載、学園小説です。温かい目で見守ってください。

第一話・好きな人

好きです。好きです。好きです。

寝る前に呪文のように呴く日々が一ヶ月続いている。

恋をすると幸せな毎日が訪れると思っていたのに、いざそんな恋なんぞというものに転がりこんでみると、切なくて苦しくてやりきれなくて、恋の病という言葉だけがしつくりと納得がいった。

「それが恋つてもんでしょ」「

この苦しみを、恋の一言で簡単に済ませてしまつ香織に少し腹がたつた。

弁当を食べ終わつた私は、一番後ろの席で、折りたたまれた携帯電話をくるくると回す。

そんなことをしながら鈴木真人のことを考えると、じわっと一瞬で幸せが広がつて顔が緩んだ。

「マコトかあ、笑顔がかわいいんだよね

私はだらしない笑顔のまま頷く。

「だいたい美由紀は欲がないんだ」

欲がないのではなく、それが上手く出せないだけです。心の中で咳いてみたけれど、口に出せないとこころがやつぱり私の欲が無いところなのかもしれない。

「まあ、それが美由紀のいいところでもあるけれど」

香織はそう言ってちょっと笑顔を止めると、恋愛だけは自分勝手にやんなきやだめだよ。という言葉に、私は大丈夫なことなど一つも無いのに、

「だいじょうぶ」

と言つて笑うと。それならいいけれど、と言つて香織も笑つた。

香織には彼氏がいる。その彼氏は私にとつて格好がいいとか、性格がいいとか、そういうことは無かつたけれど、私も真人とそんな

関係になれたなら。何て考えると香織が羨ましかつた。

「ああ、やつぱりだめ」

私はそう言つてうなだれる。ひんやりとした机の冷たさがおでこと腕に伝わり、私は一瞬驚いたけれど、そんな冷たい机さえ全て暖めてしまふほど私の顔は火照つている事に気がついた。

「ちきしょう、好きだよ」

何でこんなことになつてしまつたのだろうか。真人の笑顔は確かに好きだつた。爽やかに笑う真人は誰からも好かれたけれど、素敵な笑顔を見せる人なんてほかにもいる。だけどそう、私は見てしまつたのだ。

もしかしたらそれは見間違いなのかもしれないけれど、彼の泣いている姿を。

いつも笑顔ばかり見せる真人の涙という、正確には泣いているであろう姿という裏技に私は、あれよ、という間に恋心は生まれその心は加速度的に膨張した。宇宙は膨張していると言つけれど、そんなことは私の恋心に比べればに小さな膨張のように思えるほどに。

真人に近づくほど駆け足で過ぎていく時間は、遠くなるほどに遡く過ぎる。近づくと言つても同じ教室で、真人の後姿を眺めるだけ。それでも学校の授業は早く過ぎる。私の席から見える真人の姿は私だけのものだと、勝手なのだけれどそう思うと、幸せで、授業中の睡眠は少なくなつて、黒板の文字を追う時間も同時に少なくなつた。

「ねえ、こくつちゃいなよ」

〔冗談で言つてゐると思った香織の顔は笑つていなかつた。

「むりだよ」

ほとんど話したことすらないのに、ただ振られるだけに告白するなんて耐えられない。

真人が笑つてゐると最近むかつぐ。

むかつぐ。

むかつぐ。

借りたかつた新作のDVDがいつまで経っても借りられない苛立ちに似ているけれど、そんな

苛立ちだって今ほどではない。むかついて、苦しいのに真人を再び見ると一瞬でそれが幸せになる。そして家に帰るとまた苦しくなつて、なぜ人は人を好きになつてしまふのか。何て考えて答えがでないまま、また悶々と呼吸が乱れる。

告白することだって考えなかつたわけじゃない。だけど、好きだつていう単純な言葉を言うだけなのに、そんなことを考えるだけで私はその重さ押しつぶされそうになつてそれを誤魔化すために音楽を聴いて、涙を流すのだ。

学校の一日も、家での一日もなにが起りることもなく過ぎていく。雪のように降り積もるこの気持つに、私はただただ呆然と立ち尽くす。

第一話・好きな人（後書き）

ペースはかなり遅いですがよろしくお願ひします。

第一話・ドリームキャッチャー

ねえ、苦しいよ。

苦しくて苦しくて、ただ好きだといふことがこんなにも苦しいなんて思わなかつた。

こんな想いが幸せなの？

私は病気なかもしれない。だつて、こんなにも真人のこと好きになつてしまつたのだから。

「で、マコト君には告白したの」

バイトを終え、事務所でそう言つ充先輩に私は首を横に振る。
「しちやえばいいのに」

簡単にそう言つて、会つた初日にこのラッキーストライクは爆弾を落とした米兵が言つた言葉から命名されたんだ。なんて嘘物語付きの煙草に火をつけた。

「してません」

私が言つと、俺だつたらオーケーしちやうのに。そう言つて灰皿に軽く煙草を小突かせると、灰が散つた。

「誰にでもそう言つてますもんね」

私の言葉に充先輩は否定もせずただ笑つた。先輩の余裕がむかついた。

「先輩は彼女になんて言つて告白したのですか？」

主導権を握ろうとした私の言葉に先輩は簡単に答える。

「馬鹿だな。好きだよつて普通に告白しただけだよ」

「馬鹿ですよ」

そう言つと、先輩は可笑しそうに笑つた。大学生になつたら告白だつて簡単に出来ちゃうのだろうか。私だつて馬鹿だと思つけれど情けないほどに怖くて仕方ないんだ。だつて好きなのだから。中学校の頃の告白がみんなに冷やかされたことが心に残つているのかも

知らないとも思つたけれども、きっと違う。そんなこと考える余裕が無いほどに好きになってしまつてはいる私は何だか滑稽だと思った。そんなことを思いながら先輩を見ると、慌てた声で「ごめんなんて謝られた。

どうしたんですか？

そう言おうと思つたのに声が出なかつた。そして一瞬にして頬を伝つた感触で自分が泣いてることに気がついた。

「ごめん。つらいよね」

先輩の優しい言葉で余計泣けてきた。優しい言葉は爽やかに心のバルブを開けてしまつのだ。

「でもさ、やっぱり告白するしかないよ

私は頷く。

「もしだめだつたらむ、何でも好きなもん奢つてやるから」

「うん」

私は再び頷いた。

まるでただあやされている子供のようにだつたけれど、もうビックリしなくなつていた。

私の心は一日一日削られて、芯だけ残された鉛筆のように脆くなつていたのだと気がつく。明日こそ告白しよう。そう思うと、あの時の真人の姿を思い浮かんだ。あの時の真人はきっと泣いていた。バイト先とは反対口の駅前ロータリーから少し離れた路地で見かけたのは、バイト帰りの寄り道だった。

一ヶ月ほど前、バイトを終えた私は一緒にあがつたバイト仲間と出来たばかりのメロンパン屋に行く途中だつた。遠くからギターを片づけている姿を見て、こんな所で路上ライブをやる物好きもいるんだと思いながら近づくと、それは真人だつた。瞬間真人は涙をぬぐつた。汗なのかと思つたけれど、その日は寒かつたし、もう一度ぬぐつたのはやっぱり涙だつた。私は見てはいけない物を見てしまつたような気がして、急いでメロンパン屋へと向かつた。

どんな歌を歌つているのか。偶然見つけたときはすでに片付けて

いたので歌は聞いていなかつたけれど、香織に聞いたりオリジナルを歌つてゐると言つてゐた。

「ま」と、たまに路上ライブやつてゐるみたいんです

私が言つと、先輩が頷く。

「そりなんだ」

「もし、今日もそこで歌つていたら私、告白してみよつと思ひます」
先輩は煙草の火を消すと、そつか。と言つてにこり笑つてバックから小さな物体を私に向かつて放り投げた。私は何とか手でキャッチすると先輩の顔を見た。

「これ、インディアンのお守りやるよ」

そう言われて、手の中のものを見ると小さなドリームキャッチチャードつた。

「何これ、これ眠るときに枕の近くに上げるやつですね」

「そりみたいだけど、俺が告白するときそれを握り締めていたんだぜ」

「そつ。そり言つてドリームキャッチチャーを握り締めると、勇気が湧いて来るようすで、先輩の優しさが嬉しかつた。」「じゃあ、お疲れ様です。ありがとうございました」

そう言つて事務所を出ると

「がんばれよ」

先輩がそり言つてくれた。

第三話・告白

一瞬今日の占いが気になつた。恋愛の運勢はどうだつただろうか。
コンビニで確認しようと思つてやめた。

何だか告白をやめるための理由を探している気がしたから。
いるかどうかわからないその路地へ向かうはずの足は、時より方
向を変えていた。事務所から歩いて十分で着くその路地に、二十分
かかるつても着かない。時間だけがいつの間にか過ぎていく。いたら
告白。もし振られて私は正氣でいられるのだろうか。暗くなつた空
の下、酔っ払い何人かで歌つている歌さえ耳に残らない。

私はドリームキヤツチャーを握り締めて、路地へ近づく。近づく
たびに意識が遠く白くなつていく。メインのローターリーから一回
ほど曲がったその路地へは古着屋が最後の角となる。

一度立ち止まり息を呑む。いるだらうか。告白できるだらうか。
吐きそうになりながら、古着屋のガラスを見ると、情けない自分の
姿が淡く映つている。

勢いをつけて私は古着屋を曲がる。

いた。

うつかり落としそうなつたドリームキヤツチャーに力を入れる。
この前同様真人は片付けていた。

ドリームキヤツチャーを握り締めた手からじんじんと痛みが滲ん
だ。

とくとくと体内を流れる血液は私の心を強く叩く。鉛のよつ重く
なつた足を一步一歩送り出す作業が何だか億劫に感じられる。近づ
くたび胸が痛くて苦しくなつていく。だけど、もう引き返すわけに
は行かない。

真人の前まで来ると私に気がついた。

「まいったな」

最初の一言に私は簡単に動搖した。

「うた、聞いててくれたのかな」

真人の言葉に私は首を横に振る。

「通りかかっただけか。結構遅い時間だけど」

「うん、バイトの帰りでね」

私は笑つて見せたけれど、顔が固まっていた顔がきしきしと音をたてている気がした。真人と話したのは初めてではなかつたけれど、久々に発した私の言葉は嘘であるところが何だか悲しい。

「家、どっち方面？」

真人はギター・ボックスを担いで聞いてきた。

「駅のほう。隣の駅だから」

私が答えると

「調度良かつた。俺もそつなんだよ。一緒に帰ろうか」

真人の提案に私はこぼれそうになる笑顔を必死に堪える。

「いこうか」

真人はハンチングを被るとそう言つて歩き出した。私も急いで横に並んで歩き出した。何だか彼氏と彼女のポジションと言つ感じがして嬉しかった。

「ねえ、好きなアーティストとかつていてるの」

私が聞くと、当たり前だろ。と言つていつもの笑顔を見せる。

「ブルーハーツが好き」

もつとマイナーな名前が出てくると思つていた私は少し拍子抜けした。

「ブルーハーツみたいになれたらしいなつて思うよ」

真人の横顔に私の恋心を再確認する。

「私も好きだよ。ブルーハーツ」

真人の前でいうすきという言葉を意識してしまつて少し顔が熱くなつた。

食べ物では焼肉が好きだと、テストがやばいとか、そんなどうでもいい話が私の耳を通して心の中でぽかぽかと幸せに育つ。好きなんだ。私は真人が好きなんだ。その言葉も、声も、思考も。まだ

まだ知らないことばかりなのに、きっと何が来ても私はやっぱり私はそんな真人が好きなんだと思う。

好きなんだと思うたび真人を見てはその笑顔に私も笑った。一駅なんて早すぎて電車に乗っていることすら忘れそうになつた。もう少し、本当はもう少し二人で、本当の本当は終点まで行きたかつたけれど、たつた一駅で私たちは降りて、反対口に下りる真人と別れた。

「じゃ、明日」

真人は最後まで笑顔だつたけれど、私は最後まで笑顔でいられたのか不安だった。

学校で会えることは嬉しいけれど、それまでの間を私は何だか一人取り残されている気がした。帰り道私はブルーハーツを借りた。布団に入つてドリームキヤツチャーを掛けると私はイヤホンでブルーハーツを聞いた。ブルーハーツの熱い言葉を聴きながら、私は眠りに落ちた。

第四話・やせしわ

やかましい音で目が覚めると、それはブルーハーツだった。

この想いが青春と言つのか解らないけれど、これはこれで悪くない。今ならそう思えるほどに昨日の真人との会話は私の心を有頂天にさせた。腹立しかった笑顔は自分に向けられた瞬間幸せになつて、あの怒りは私以外の人へ向けた嫉妬心だったのだと気がつく。そして学校に行けば真人がいる。

何だかすべてに感謝したい気分だ。

いつもの学校の朝。教室でそういうと、アンタは何でめでたいんだ。なんて香織に言われた。

そんな言葉さえ、祝福の言葉に聞こえてにやにやしていると、香織も呆れて笑う。

「かおり、少しやせた?」

わずかに顔がシャープになつた氣がして聞いてみると、ダイエット中、とこたえた。香織は何でも辛抱強く集中力がある。だから、学校の成績も良いしお洒落や流行に対しても敏感で、カラオケでも多少の好みはあるにせよ大抵の新曲は歌えた。普段当たり前のよう近くにいて気がつかなかつたけれど、そう考えると香織は凄い女だと思った。

「べつにやせる必要なんてないのに」

そう言つと

「ちよつとお腹がね」

「何ダイエットやつているの」

そう聞いた途端真人が教室に入つてきて私の意識がそちらに向かう。それを見た香織はすきなんだねえ。なんて語尾を延ばしたけれど、それは何だからかわっている気がした。

真人は入つてくるなり身近な友達に挨拶をすると、たいした音も

立てずにこちらへと向かってきた。

「おはよー」

「昨日は不味いところみられちゃったね
片付けだけだったけれど、それが不味いとこならそうこうことになるね」

私が言うと真人はそうだつたね。といつて香織のほうへ向いた。

「香織が言つたわけじゃないよね、歌つていること」

「だったらあんたは歌を聴かれているよ」

「それもそうだ」

そう言つて再び真人はこちらを向いた。

「歌つていること、出来るだけ秘密にしておいてほしいんだ」

そう言つと、じゃあ、と付け加えて自分の席へと向かつた。そしてこの時頭をよぎつた。香織は真人がオリジナルを歌つていることを何故知っていたのだろうか。私の視線に香織は気がつく。

「彼氏がね、仲良かつたんだ。真人と」

「そりなんだ」

そう言いながらも香織への嫉妬は消せない。私の知らない真人を香織が知つていて、私は真人の何を知つているのだろう。そう考えると、ほとんど何も知らなくて昨日やつとまともに話せただけで有頂天になつちゃつていた自分に気がつく。真人がブルーハーツを好きなことを知つても、そんなの一日中聴いていても、真人のほんの一部に触れたのに過ぎないんだ。

「ごめんね」

香織は何も悪くないのに謝つた。だけど、私はむくれていた。そんな自分があまりにも最低で涙が出そうになつた。

「こんど、真人の歌ききたいな」

私が言うと、香織は立ち上がりて真人のほうへと向かつた。戻ってきた香織は

「来週の土曜日七時くらいだつて」

と言つた。

香織の優しさが嬉しくて、羨ましかつた。

第五話・Saturday

私は翼がほしい

そら飛ぶ翼がほしい

けれど、翼があつても私はとべない

そら飛ぶ勇気がないから。

だから私はほしい

そら飛ぶ勇気が

あなたへ会う勇気が

あなたに触れる勇気が

ネットで見つけたこの詩が好きなんだつて香織に言つたら、いい詩だねつて言つてくれた。駅前のマックとスタバは込んでいた。だから私たちは少し離れた小さなドトールでカフェオレをすすつた。ガムシロップを入れすぎたカフェオレが甘つたるい。

あの日からの一日は長かつた。胸に膨らむ希望といづかの風船はどうどん膨らんで、期待で胸がいっぱいになるといづのは、いづいうことを言つんだと思った。

「雨が降つたらやらないよね」

私が外を見て言つと、香織はうなずいた。

「まことのオリジナル曲、聴いたことがあるの？」

私が聞くと、香織は一口カフエオレを口に入れた。

「あるよ。でも、一曲だけ。もう一曲あるらしいんだけど」

「へえ」

私はそう言つて再び外を見る。空はひびく濁っていた。そんな空を見ると、なんだか悲しくなってきた。

「今日、聽けるといいね。二つとも」

私がうなずくと、雨が降つてきた。小さな水滴がガラスに鋭くへばりついた。いくつか続くとその数はとたんに増えた。外を歩いて

いる人が傘を取り出す。一つ一つ花が咲くように開かれる傘がやっぱり私には悲しく映つた。

そして、香織の携帯が鳴つた。

「今日、ダメだって」

やつぱり。自然と出た感想はやつぱりだった。私は真人の歌が聴けないんだ。

真人への想いは、あの日から教室で話す機会が増えて、切ない時間が幸せな時間に変わつていつた。だけど、私はもうそれじゃ我慢できなくて、真人のオリジナル曲が聴きたかったし、真人ともっと話をしたかったし、真人に触れたかった。

「気持ちってさ、理性じゃどうしようもないよね」

私が黙つていると香織はそう言つた。

「そうだね」

「ねえ、カラオケ行こうか」

私は声を張り上げて思いつき歌つた。告白もこのくらい思いつきでできたらいいのに。そう思いながら私は声をからした。

第六話・雨の日

土曜日に降った雨は月曜になつてもやまざに、私の気持ちを少しずつ鬱にさせた。

学校へ行くのがだるい。身体を動かすのもだるい。そんなことを考へていると真人への恋心も友達との人間関係も何だかだるい感じがしてきた。

行つて友達の中に混ざればそんなどるとも飛ぶのに。

土曜日のカラオケで私は香織を通して真人とメールアドレスと番号を交換した。そのアドレスも番号もまだ私の携帯とは無関係のように入つてはいるだけだつた。

「体調悪いんだつたら学校休む？」

私の心と無関係に母親がドア越しに聞いてきた。

「いや、いくよ」

何だか今日休んだら明日も明後日も休んでしまつ気がしてそう心えた。

外に出ると冷たい空気がむき出しの顔を襲う。

六月の雨はあんなにしつゝとうしかつたのに、十一月も近くなるとひどく冷たくなる。

そんなことを考えながら通り過ぎる周りの景色をぼんやりと眺めた。

特別目に留めることもなく流れる周りの景色が、何だか自分の高校生活を写しているようできょつとして立ち止まつた。そのまま自分の行き場所を見失つてしまつたような気がして、突然学校へ行きたくなくなつた。

「まいつたな」

そう呟いてみたけれど、誰が応えてくれるわけでもなく、言葉はただの言葉として私の耳にだけ届いて消える。真人にメールでも送らうかと思つて携帯を取り出したけれど、やっぱり何を送つていいく

のか解らなくてポケットにしまった。

私はそのままコンビニへ行つて雑誌を買ひつと、近くのマックへ行つた。

壮健美茶を持つて禁煙席の一階へと足を運んだ。学校をサボると決めた途端足は軽くなり、雨の音さえ何だか心地よく聞こえてしまうのは何故だろか。そして、上り終え、隅の席が空いているか確認した途端私は壮健美茶を落としそうになつた。

真人がいた。

「おう」

私のことに気がついた真人は待ち合わせの人が来たかのように、いつもの笑顔で私に挨拶をした。

「なにやつてんの」

自分の立場を忘れそう聞いてしまつたけれど、何だか真人の笑顔に救われた気がして恥ずかしい。

「いや、今日雨だろ。だから行く気がしなくて」

南の島の大王でもないのに真人は平然とそう言ってのけた。

そう思いながらも

「そつちは」

と言われて真人と同じ答えを返してしまつた。

「早く座りなよ」

同じテーブルに座るのは少し気が引けたけれど、断る理由も見つからず対面に座つた。

真人はホットケーキをプラスティックのナイフとフォークを器用に使って、一片にしたホットケーキを流れるように口に入れた。ギターをやっている人が全員そうではないだらうけど食べる姿が早くて綺麗だつた。

「美由紀つてさ」

「うん」

「部活入つていなかつたよね」

「うん」

「なんで」

「なんで？」

真人の手の動きに見とれていた私は何も考えずに、返事をしていった。

「何で部活やらなかつたの」

ふと私が真人の顔を見ると、思ったよりも顔が近くて驚いた。慌てて硬い背もたれに背中を押し付けると、壮健美茶を手にとつてストローを咥えた。どんなに考えても興味も無くて大変そうだったから。と言う理由以外見つからない。

ストローをくるくる廻しながら言葉を探した。

でもやつぱり見つからなくて

「興味がなかつたから」

と言つた。

「そつか、そだよな」

真人は何に納得したのか解らないけれど、一人でそう呟いた。

「真人も入つていないんでしょ」

真人こそ軽音部にでも入ればよかつたのに。

「そんな時間無くてさ」

何に忙しいのか解らないけれど、真人はそう答えた。

「俺、これから行くところあるから」

「そつか」

真人が立ち上ると、取り残された気がして孤独が込み上げてきた。

「じゃ、またな」

「うん」

私は一人壮健美茶を啜つてこれから何をしようか考えた。

会いたい！ってメールで送つたら会えるのかな。

今何してる？ってメールで送つたらちやんと返つてくるのだろうか。

そんなことを思いながら携帯の画面を眺めてる。会つているときはただ心臓が高鳴つて幸せな気持ちなのに、あえない時間はただ苦しめてせつない。

「彼氏と別れそうなの」

香織からの電話に出ると、香織は開口一番そういった。私はどんな言葉をかければいいのか解らなくて、そんなんだんだ。だなんて他人事のようにつぶやいてしまった。

「なんでかなあ」

香織にわからないことが私にわかる筈もなく、私はただ恋愛つて難しいね。だなんてありきたりの言葉を返した。

「あいつのこと、好きなんだ。好きなのに、あいつは俺とは合わないって、いったいどんな女になればあいつに合う女になれたのかな」
そう言つて香織の嗚咽が聞こえた。香織が泣く声を聞いて私はただうろたえた。香織は私から見てもいい女だと思う。だから、香織が振ることはあっても振られるなんて考えもしていなかつた。ただ、香織の彼氏が友達に茶化されているときに、付き合つていく自信がないとつぶやいたことを思い出す。

「私、頑張つているのに」

なんだか私も泣けてきた。熱い涙がこぼれる。頑張りすぎて、それが彼氏にとつて重かったのかも知れないと思つた。勉強だつてダメイエットだつて頑張つて成功してきた香織がその頑張りで恋愛が失敗するなんて、私には理不尽に思えて、たいして頑張つているわけでもなく真人のことを好きだとか言つてはいる自分が情けなかつた。

「香織はがんばってるよ」

そう言いながら、香織が瘦せていつていたのを思い出す。それはダイエットではなくて、やつれていっていただけだったのだ。

「香織、最近うまくいっていなかつたんだね」

「うん」

言つてくれればよかつたのに。そういうかけて止めた。
気がつかなかつたのは私だつたんだ。真人のことばかりで、香織の話をちゃんと聞くこともせず。香織は私に気を使って言わなかつたのだと今になつて気がつく。

私は香織に何をしてやれるだろうか。何もできずにただ私は一緒になつて泣いた。

第八話・香織からのメール

わかれちゃつた。

学校から家に着くと直ぐに来たメールは香織からで、二人で泣きあつた電話の三日後だった。

真人のことでのうきうきしていた自分、真人との些細なやりとりに嫉妬していた自分勝手さを思い出すと、自分自身に腹が立つた。電話でもしようと思つたけれど、何を話せばいいのか解らなくてベッドの上に横たわり携帯のディスプレイを眺めた。意味も無く電話帳を開いたり閉じたりしながら香織に掛ける言葉を探した。私は香織にたくさん助けてもらつているのになぜ私は香織のために言葉さえ掛けることが出来ないのだろうか。

そう思いながら寝返りを打つた瞬間携帯が鳴つた。
真人からだつた。

通話ボタンを押して私は息をゆっくり吸つた。

「おう」

「おう」

真人の挨拶に私も答える。

「今電話大丈夫？」

「うん」

「香織、別れたんだろ」

「そうみたい」

真人と香織の彼氏が知り合いだつたことを思い出す。

「どうか、それだけちょっと確認したかったんだ」

「ちょっと待つて」

私は何も出来ないかもしれない。けれど、真人には歌がある。

瞬そう思つた。

「ねえ、歌つてあげてよ。香織、元気付くと思うんだ」

携帯越しの沈黙が重い。

「だめかな」

真人の部屋の音がするような気がした。実際にはただの沈黙なのに。

「俺のうた聞いたつて元気になんないよ」

「そんなこと無いよ。私は聴いたことないけれど、香織は絶賛していましたよ」

雨が降った土曜日のカラオケを思い出す。別れた彼氏とのはじめのデート、最後に真人の路上ライブを聴いたのだと。そのときは気づかなかつたけれど、悲しそうにそう言つて笑っていた香織の姿が私の胸を刺す。

「わかった」

静かな返事が聞こえた。

「ありがとう」

私は少し興奮ぎみにお礼を言つ。

「じゃあ、明日夜八時に仲良し広場に連れてきてよ」

「うん。わかった」

仲良し広場は学校から少しさなれた小さな公園だった。昔あったジャングルジムは壊され、背の低い滑り台と「ラン」「がー」とベンチがいくつかあって、春には桜が咲くので、たまに花見の酔っ払いジョギングをしている人のストレッチ場所以外めったに人は来ない。

「じゃあ、明日学校で」

「うん、じゃあね」

私は電話を切ると急いで香織に電話をした。

励ましの言葉も掛けずに

「明日、夜時間あるかな」

そう聞いていた。

「うん」

香織の声は思ったよりも元氣で安心した。

「じゃあ、空けといてね」

「何があるの？」

「それはお楽しみだよ。それより大丈夫なの？」

私の質問に少しだけ間をおぐ。

「うん。何となく解っていたし」

「そう。これからどうか行こうか。服とか買いに」

私の言葉に香織は、今日は少し一人で考えたい。と答えたから、香織がそう言うならそうするべきだと思つて、明日もちゃんと学校に来てよ。と言つて電話を切つた。

電話を切つて私は少し不安になつた。本当に真人の歌を聴いて元気になるだろうか。

いや、きっとなる。私は自分の気持ちを盛り上げた。カラオケからの帰り道、私もすゞい楽しみにしていたのに残念だな。と言つた香織の言葉を思い出す。

第九話・冬の公園（前書き）

ここに出てくるオリジナル曲はいずれ発表しようと思っています。因みにこの物語を作ろうと思ったキッカケです。

第九話・冬の公園

人はどうして人を傷つけるのだろうか。
幸せは傷と引き換えに手に入れるものなのだろうか。

冬に行く夜の公園はひどく寒い。

今日の学校での香織は終始明るく振舞つていたが、逆にそれが痛々しくて、つらくても泣くことが出来ない学校の教室は窮屈なものだと思った。一度家に帰り、公園近くのコンビニで香織と合流すると公園に向かつた。向かいながら私と香織の間に会話は無かつた。約束の時間に少し早く来着いた園には人は誰もいなく、隅で猫だけがのっそり歩いていた。

「わたし、浮気されたんだ」

ベンチに座つて私が真人に着いたことをメールで知らせると、香織はそう言った。私は香織のほうを向くと、香織は空の星を数えるように上を向いていた。その姿をみながら、私は無性に香織の元彼に対しても腹が立つた。

「そんな男は最低だ」

「ほんと最低だよね」

私の言葉に香織が応える。

「でも、そんなあいつが本当に好きだったんだ」

香織の言葉に私は、そう。と言つて私も空を見た。小さく輝く星が時々空気によれ、刹那的に消えてはまた輝いた。

「おまたせ」

「ぜんぜん」

私がそう答えると、真人はブランコの仕切りの棒に座つてギターを取り出した。いつも笑顔の真人は真顔のまま、何も発せずおもむろにギターを鳴らし始めた。曲名も言わなかつたからよく判らなかつたけれど、昔のコピー曲で一曲目はブルーハーツの『ラブレター』

だつた。

三曲目を終えると。

「「J」からはオリジナル曲」

そう言つて、歌いだした。真人の歌声は特別声量があるとか、音域が広いとかは思わなかつたけれど、歌に心がこもつていて、聴く人を優しく包んでくれているようだつた。

オリジナルの一曲目の途中で、香織は泣き出したから、私も思わず泣き出した。

泣きながら、香織の横で不謹慎だと思いながらも、こんな歌を歌える真人がますます好きになつた。

オリジナルの一曲目は幸せな優しい曲だつた。

「俺はさ、基本的に本当に好きだつたら、いくらでもチャンスはあると思うんだ。これから長い人生の中、学校生活の中でも、もう一度振り向かせることが出来るチャンスが」

真人はそれだけ言つて一曲目を歌いだした。

一曲目は悲しい歌だつた。子供の頃の恋心の歌。

そしてそれが真人のことだと思うと、泣けてきた。真人が路上で歌つてゐる理由がわかつて、同時に真人の恋心も解つて告白する前に振られた気持ちだつたけれど、それでも、それだからやつぱり私は真人のことが好きなんだと思つた。

「実話なの？」

私の言葉に真人は、

「昔の話だけどね」

そう言つて照れ笑いを見せたけれど、それがどうしても悲しそうだつた。

「以上、真人でした」

真人がそう言つと香織はありがとづ。と礼を言つた。

第十話・帰り路（前書き）

少しずつでも進めてなんとかこの小説は書き終えようと思いました。
いつか、書き終えたいです（汗）

第十話・帰り路

布団に入ると真人の歌が浮かんできた。

真人のギター姿とともに。

真人は未だにその人の事を想つてゐるのだろうか。

肺に入つてくる冷たい空気が身体の火照りをどんなに下げようとしても冷やすことはなく、ただ頭がさえていく。ただ同じ事をぐるぐると考え、頭の横に転がる携帯も同じようにぐるぐる廻す。

真人は私たちを送つてくれると言つたけれど、何となく真人と時間と共に共有するのが気まずくて、断つた。それにそこまでしてもらうのも何だか悪い気もした。暫く話もせず香織と二人して星を見ながら歩いた。寒さは一段と増していたけれど、寒いほど星が綺麗に思えるのは何故だろうか。そして寒いほどアスファルトは温かみを持つてゐるような気がするのも。

「まだ好きなのかな」

学校の近くを通り過ぎたところで突然口を開いたのは香織だった。

「どうだろう」

私はその言葉の解釈に少し戸惑つた。私が？香織が？それとも真人が？

暫くアスファルトを二人の靴がたたくと再び香織は白い息を吐いた。

「中学生の頃の恋心なんて」

ふわふ、と浮かんだその白い息は一瞬で消え、なんだかそれが切ない。

小学生だろうと中学生だろうと、いまだに歌い続けているのだからやはりまだ好きなんだろう。小学生の頃の恋心なんて忘れてしま

つたし、中学生の恋心だって私の場合、今となつてはただの思い出となつてしまつていいけれど、それはきっと私が歌い続けるだけの想いがなかつたからで、それはもしかしたら真人と出会つたからかもしれない。

「まだ好きなんじゃないかな」

私はそう言つてもう一度星を見た。

「そうなのかなあ」

そう言つて香織も星を見た。

「そうなんだよ」

「そうなんのかあ」

そこまで話すと、香織と別れるところに辿り着いた。

「じゃ、今日はありがとう気をつけてね」

香織の言葉に、私も同じ挨拶を交わした。

まだ好きなのだろうか？

香織と別れて一つ一つ足を繰り出すたびに、その言葉が頭でちらちらと気になりだし膨らんでいった。途中猛スピードで走る自転車に轢かれそうになつて罵声を浴びせられた。ふと私は踵を返して公園へと向かつた。まだ真人はいるかもしね。直接会つて聞いてみよう。

公園から出て二十分、いるはずもないのに、身体は勝手に動いていた。繰り出す足は徐々に速くなり、歩くペースから早歩きになり、上体を前に倒した。それでもなお加速は収まらず、私は走り出した。みるみる学校まで近づいたと思つたらすぐさま後方へと流れ、吐く息は大きく白くまんべんなく排出された。じわりと汗が滲み出し、頭の中はシンプルに真人の答えを求めた。

公園の入り口に仁王立ちし、中を見たがよく解らず、そのまま地面の感触を踏みしめるように中へ入つていつた。歌を聴いたベンチまで辿り着いた。額から零れた汗が顎を伝つて地面に落ちる。

いない。

当然だ。

私は一人ブランコに乗りながら、呼吸の乱れが収まるのを待った。急激に身体は冷やされていくのがひどく心地いい。ブランコを少し漕ぐとベルトのきしむ音が聞こえた。私は何だかそれが嬉しくなつて精一杯漕いだ。ぶんぶんと揺れる身体が宙に浮いているようで一人はしゃいだ。

何だか恋心も悪くない気がした。
そして家に帰つて風邪をひいた。

ねえ、しつている?

わたしがあなたを好きな事。

ねえ、気がついて

わたしがあなたを好きな事。

だけどやっぱり気がつかないで…

朝起きると、頭はストーブに当たりすぎたときのようにぼうっとした。

このまま学校を休もうかとも思ったが、やはり昨日の歌のことが気になつて、放課後本人に訊くことにした。本当に訊けるのか甚だ疑問は残つたけど、今日訊かなければこの風邪が治らないような気がしたし、むしろこの風邪は真人が原因で引き起こされたと思うと、今日訊かないわけには行かないのだ。

授業はいつも以上に退屈だった。授業だけでなく、休み時間の香織や他の友達と過ごす時間さえも億劫に感じるのはやはり自分は風邪を引いているせいなのだと思うと、悪いこと全てが風邪のせい出来る気がして、誰にもばれないように一人で笑つてしまつた。

どうやつて訊き出せば良いのだろうか。

「私が放課後うまくよんであげるよ」

私を悩ませる疑問に香織はいとも簡単にそう言つて笑顔を作つた。

「どうやつて?」

「つ伏せてなかなか動かない頭を伸ばした腕に転がしながら香織のほうを見る。見ながらやつぱり香織はモテる顔をしているなあ、なんて考えてしまつのも、やつぱり風邪のせいなのだからつ。

「まあ、まかしといでよ」

何だか楽しそうに言う香りにこのまま任せていいいのか不安が残つたけれど、これ以上考へてもいい案の浮かばない私は観念したよう

に香織にまかせることにした。

放課後になつても氣だるい氣分は抜けず、なんだか風邪が悪化したようだつた。寒氣が時折身体の芯から頭のてっぺんに突き抜けては小さく身震いをした。教室から見える校庭では、サッカー部が練習を始め、掛け声が聞こえる。香織は放課後教室でみんなが帰るまで待つているように言つたまま先に教室を出て行つてしまつた。教室から一人ひとり出で行くと、その度に挨拶をするのが面倒で寝たふりをした。

私はここで何をしているのだろうか。

ぼんやりしていると、そんな気持ちが浮かんだ。

遠くから様々な部活動の音が聞こえると、少し取り残された気がするのに、そんな教室が好きなのだと確信した。その心地よい教室に包まれるように私はうつ伏せたまま目を瞑つた。真人のことが少しづつ頭の中で小さくなり、とても穏やかな気持ちになつた。

真人が誰のことが好きでもやっぱり私は真人が好きで、それに協力してくれる香織がいて、友達がいて、なんなことが何だか幸せで…

私は少しずつ暗闇に吸い込まれていくように眠りに落ちた。

ねえ、あなたは
アナタハダレガスキデスカ？

広い砂漠の中で私は歩いている。

さつきまで出ていた太陽が隠れていくと暗闇が少しづつ熱を奪つていった。空気が凧いで、澄んでいく。けれど、暗闇は私からも体温を奪つてなんだか寒い。僅かな温もりを求めて足元に広がる砂にすがつてみるのに、その砂さえ暗闇に飲み込まれていく。

私はどうして良いのか分からず寝転んだ。するとそこには小さな星々が私を包むように輝いていた。輝きは微かに温もりを発していて、ついに見つけた温もりに私は身をゆだねた。私はこの温もりを求めていたのだろうか。だったら私はずっとここにいたい。

そう思っていたのもつかの間、張り付くことない砂が私を飲み込んでいく。私は砂漠の中に飲まれるように沈んでいった。私は抵抗をしない。私の心はいつしか温もりを見つけただけで満足していただろうか。本当に欲しい温もりもきっと私はこのよう満足してしまうのだろう。

けど、それで私は本当に幸せ？

目が覚めるとそこには真人がいた。

「だいじょうぶ？」

真人の言葉が心にしみた。私の心は夢の中の砂漠のようにぬくもりに乾いていたのかもしれない。私はそもそも身體を起こすと大丈夫。と小さく答えた。答えながら私の肩にかかった学ランが星々の温もりだったことに気がつく。

「で、話って」

真人の言葉でふと現状を思い出す。

香織が約束通り呼んでくれたのだ。でもビリやつて？

「ねえ」

飛び出した声はなんだか自分の物のようには思えなかつた。

真人は目の前の机に座り、いすに足を乗せると次の言葉を待つよ
うに前かがみになつた。

「昨日はありがと」

そういうと真人はさらりと笑つて、たいしたことないよ。なんて
返した。そんなことを言いたかったのではないのに。

「それだけ？」

真人がそう言ったので私は首を横に振つた。真人の歌を思い出す。
「あのうた」

私の言葉はのろまな亀のように漏れる。

「まだ、まだその子のこと忘れてないの？」

私はおもるおもる真人のほうを見る。

「うん」

真人はあつさり頷く。

「好きなの？その子のこと」

震えていたかな、私の声。訊かなかつたほうが良かつたかもしれ
ない。でも、もう遅い。

「ずっと、一緒だつたんだ」

真人は両手を机に乗せ、少し後ろにのけぞると話しだした。

「小学校入った時からずっと一緒にだつたんだ。五年間。一緒に登校
して、一緒に帰つて、一緒に寄り道して、一緒に遊んで、恋愛感情
とか好きとか、具体的な感情は解らないけれど、一緒にいて楽しく
てそれが普通だつたんだ」

そこまで言うと、ふと真人は外を見た。外はすでに暗く、星が輝
きだしていた。だけどその輝きからは温もりは感じない。

「そいつは、茜は六年生になる前に引っ越した。引っ越して暫くす
ると茜から手紙が来たんだ。だから俺も手紙を返して、それから暫
く手紙のやりとりをするようになつていつた。最初は毎日のように

していった手紙のやり取りも、暫くすると月に一回くらいになつて。だけど、毎月毎月、それは続いたんだ。一年生になつて突然手紙が返つて来なくなるまで。俺は返事が来なくなつても、三ヶ月間今まで通り送つて行つた。その三ヶ月目の手紙で久し振りに返事が来て、でも

真人の言葉が一瞬とまつた。

「でも？」

私が促す。小さな沈黙が教室の底へと広がつていいく。水槽に落とした墨滴のようで、溜まっていく空気が重く感じた。

「でも、」

真人が肺に空気を入れる音が聞こえる。その空気もどこか黒い気がした。

真人の肩が小さく刻み、そして真人は振り返つた。

「でも、しんじやつてたんだ。最後の手紙は茜の母親からだつた。茜の病氣で引越しをしたこと。途中から茜の母親が代筆していたこと。返事を返せなくなつて一週間後に死んでしまつたこと。馬鹿みたいだろ？死んだ相手に手紙を送つていたんだぜ、もう届かないのに」

そう言いながら真人は笑う。

泣きながら。

あの時と、初めて路上の片づけをしている時に流した涙と同じ涙を流して。

けど、だから真人は歌を歌つているのだと解つた。空に歌うよう

に上を向いて。

「そなんだ」「

私の力ない言葉がふわふわと浮かんで消えた。煙草の煙みたいに。こんな時、何て答えるべきなのだろうか。真人の気持ちが空気を伝えて私の胸を揺さぶつた。悲しい気持ちはこうやって伝染するのだと、この時初めて実感した。でも、私は泣かない。泣いてたまるか。

「そなんだ」

今度は力強く声を出した。

これは私の決意表明。想い出への挑戦状なんだ。

私は立ち上がった。経つた瞬間ふらつきそうになつて熱があつたことを思い出したけど、負けるわけにはいかない。

「かえろうか

私が言うと真人が頷いた。

今度はいつもの笑顔で。真人に残つた涙の後を見ないようにして

私は勢いよくバツクを手にした。

黒い空気を教室に残すように私はすんすんと歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310a/>

すき

2010年10月8日14時36分発行